本と地域の情報誌
県北どらくろあ
第126号　2026年9月1日（毎月1日発行）

新・芸備線ストロール①

備後三日市駅（みっかいち）

「列車通学の最寄り駅と駅&人生相談ノート」

8月17日月曜日、朝の9時半に自宅を出た。いつもの車ではなく歩き。6月の腰の手術後、本格的に歩くのは今日が初めてなので、ドクターの指示で使用を止めていたコルセットを締めた。腰は安定したが、猛暑で汗がふき出てくる。

10分ほどで備後庄原駅到着。窓口で備後三日市までの切符を買う。距離にして2キロぐらいなので、料金も150円と安い。1・2番線ホームから9時57分発の三次行きに乗った。新・芸備線ストロールのスタートである。通学時間は過ぎているし、今は夏休み期間なので、学生たちの姿はない。乗り込んだのがわたしを入れて3人、先客が4人いた。

自分の生活エリアなので、どこを走っているのかはわかるのだが、車窓から見る景色は新鮮だった。汽笛のような警笛を何度か響かせながら、車両は備後三日市駅に到着。乗車時間は2、3分だ。

ひとりホームに降車した。備後三日市駅に来たのは初めてだった。わたしにとっては憧れの駅だった。広島県立庄原格致高校の生徒だったとき、隣の三次市から通って来る生徒もけっこういた。下校時、仲の良い友達と一緒に校門を出るが、三日市駅に向かう生徒とはすぐに別れる。列車に乗って通学することに憧れを抱いていた。

昭和5年（1930年）、芸備鉄道により三日市停留場として開設された。昭和8年、芸備鉄道国有化に伴い、鉄道省庄原線所属となる。同時に停車場に昇格し、備後三日市駅に改称された。

最初から駅舎はなく、無人駅だったようだ。武田祐三氏の名著「芸備線」には「伝統を誇る無人駅」と形容されている。ホームには小さな待合室。わたしが格致高校に通っていた50年前と同じものかどうかは、調べてもわからなかった。しかし、木のベンチは何度もペンキが塗りなおされているようで、かなり年季が入っている。

クリアケースに駅ノートが置かれていた。今年の5月の書き込みで「岡山より松江→宍道→備後落合→なう」と旅程が記されている。座席が埋まるほど乗客がいたそうで「今は何でもAIの時代になり効率第一になっていますが、そのなかでも変わらぬ光景を見にあえてゆっくり走る一両列車に揺られる日も新鮮でいいなあと改めて感じさせてくれる一日になっています」、しみじみと同感。

もう一冊「人生相談ノート」がある。パラパラとページをめくると「今日はバレンタインデーですが、今年もチョコレートもらえませんでした。もっと自分をみがきます!!」。ていねいな赤字の“回答”も書かれている。他にも、学生だけではなく、社会人の書き



最初から駅舎のない無人駅だった


「おおぶけさん」と呼ばれている上原八幡神社

込みがけっこうあるのには驚いた。
　ホームから降りて坂道を下ると、大きな田んぼの前に出る。稲穂が首（こうべ）を垂れて、その上空をトンボが群舞している。胴体が赤みを帯びているのだが、赤トンボにしては色が薄い。あとで調べると、どうやらウスバキトンボではないかと推測。お盆の頃に成虫がたくさん発生するので、「精霊トンボ」とか「盆トンボ」とか呼ばれることもあるらしい。
　ウィキペディアの記事によると、まず東南アジア・中国大陸から南日本で発生し、数回の世代交代を繰り返しながら、季節の移ろいと共に日本を北上。熱帯性で寒さに弱いので、日本ではほとんど越冬できない。渡りで1万キロ以上を移動、NASAの研究などによると、地球上で最も長い距離を渡る昆虫とされている。


校名の由来は中国の儒学の「格物致知」

　鉄橋の下の細い道をくぐり、高台にある東小学校の脇道を下って行くと、上原八幡神社がある。武田氏の「芸備線」によると、この辺りの小地名が「大深」で、氏子の人々はこの神社を「おおぶけさん」と呼んでいる。深田（ふけた、湿田）に由来する地名だろうと武田氏は推察。狛犬が今にも飛び掛かってきそうな態勢、「出雲構え獅子」と総称される姿である。
　上原八幡神社の前を通り過ぎると、国道183号線に出る。さらに三次方面に向かうと、「備北丘陵公園」入口への三叉路がある。


境内の榧の大木が市の天然記念物に指定

　備後三日市駅の下の道に戻って、東方面に歩く。江戸時代の備中伯耆（ほうき）路だった道だ。ゆるやかな坂道を進むと、桝形（ますがた）神社の前に出る。古くは祇園社と呼んでいたので、「三日市の祇園さん」と地元の人は呼んでいる。この狛犬も出雲構え獅子、出雲文化の影響がうかがわれる。
　さらに進むと国道432号線に出て、格子やうだつのある古い建物がまだ残っている。この辺りが街道筋の中心部で、文字通り三日に市が立ったのが地名の由来である。三日市の通りを北に曲がってしばらく歩くと、庄原格致高校がある。
　明治30年（1897年）、小田源吉により「私立格致学院」として設立。昭和13年（1938年）、「広島県立格致中学校」と改称した。校名の由来は、中国の儒学の古典である四書・五経のうち「大学」に収められた「格物致知」の言葉。「格物」とは、物事に真剣に取り組むことであり、「致知」とは知や技を我がものにすること。この記事を書くためにおさらいしたが、すっかり忘れていた。
　校門の外から見る母校は、ほとんど雰囲気が変っていない。一番多感な時期を過ごした場所だ。思春期のアレルギーで、真っ赤に心を腫らしていた日々を思い浮かべた。太宰治の「人間失格」に出合って、救われた想いがした。
　東小学校の裏山にある永明寺に向かった。奥まった場所にある山寺だ。榧（かや）の大木が有名で、胸高胴囲4・1メートル、樹高約22メートル、庄原市の天然記念物に指定されている。武田氏の「芸備線」で、「永明寺の古猫」という昔話が紹介されている。以下、要約である。
　時々便所の手拭がなくなるのを不審に思った住職が注意していると、飼い猫の三毛猫が手拭をくわえて駆け出した。後をつけてみると大勢の猫が集まって踊っている。「永明寺おそかったのう」と中の一匹が声をかけると、三毛猫も手拭をかぶって一緒に踊りだした。先に寺に戻った住職が、帰ってきた猫に「永明寺おそかったのう」と声をかけると、猫は飛び出し、再び帰ってはこなかった。
　永明寺の山門を出てしばらく歩くと、足腰の痛みが限界にきて、腰を降ろしてしばらく休憩した。近くの草むらに、ひょろりとした茎にオレンジ色の花が群生している。細い花弁はノカンゾウだろうか。ワスレグサという別名がある。この花を着物の紐に付けておけば、嫌なことを忘れられるという俗信があるという。

今月の3冊

どら書房の店主が毎月オススメ本を3冊選んでご紹介します。

「満州国演義」

船戸与一 著　新潮文庫

ハードボイルド作家の船戸与一が、末期の癌に侵されながらも書き上げた遺作である。全9巻の大作で、腰の手術の入院中に読了するつもりで持ち込んだが、2巻しか読めなかった。「小説は歴史の奴隷ではないが、歴史もまた小説の玩具ではない」、2巻の単行本が出たときの作者の言葉である。

歴史的事実を骨格にしているので、従来の船戸作品のダイナミズムは影が薄い。日本の昭和の負の歴史を正面から扱っているので、物語は重苦しい。馬賊のことを知りたくて読み始めたが、戦争の……、いや民族（人間）の本質を冷徹に描いている。続きを読む覚悟はできていない。

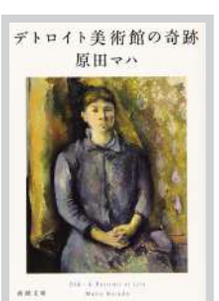


「デトロイト美術館の奇跡」

原田マハ 著　新潮文庫

表紙カバーにセザンヌの「マダム·セザンヌ」の絵。デトロイト美術館、通称DIAの至宝だ。この絵に魅せられた3人の物語が、独立した章になっている。最初は貧しい黒人の一般市民。2人目は、モダンアートの蒐集家で「マダム・セザンヌ」を含むコレクションを寄贈した富豪。3人目はDIAの現役のチーフ・キュレーター。みんなセザンヌの絵を絶賛している

デトロイト市が 2013 年に財政破綻して、DIAのコレクションの売却が検討される。高価な美術品よりも退職者の年金を守れ！　コレクションの散逸は必至、と思われていたが、奇跡が起こる……。表紙の絵を見て、美術音痴だと自覚。



「地味な資格」だけで人生は豊かになる

市川義一 著　Gakken

暑さボケした頭でも楽しめる本。芸人の著者が取得した 47 の資格が紹介されている。実用的なのは「食品衛生責任者」、厚生労働省が管轄する国家資格が、一日の講習と簡単なテストで取得できる。飲食店には一店舗に一人、必須の資格。

笑ったのが「カッパ捕獲許可証」、ネットで誰でも申請できて試験は不要、費用は許可証の郵送費を含めても 300 円。柳田国男の「遠野物語」で知られる岩手県遠野市の観光協会発行。この資格を持っていたら、カッパを捕獲した際に 1000 万円の賞金がもらえるらしい。ちょっとだけ欲しいと思ってしまったが、有効期限は 1 年。



どら書房 ≪貸本屋システム≫

・店内で販売した本は、どら紙幣 (店内専用通貨) であれば半額、現金であれば 3 割で買い戻します。※破損や汚れがあれば値引

・書籍購入⇒読了⇒どら紙幣と交換⇒新たな書籍購入、貸本のような感覚でご利用ください。

寄稿エッセイ

「虫の知らせ」

高柴順紀（菊栽培農家）



毎朝仏壇にご飯をお供えしているのに、七月中頃まで仏壇隅の虫穴に全く気が付かなかった。それも沢山の穴だったのに。かつて『県北どらくろあ』１０８号でミズナラがキクイムシで変色しているのを報告していたので、たぶん木を食う虫にやられたのだと推察はした。



私の家は大正時代に造られ、周りの牛飼い農家同様の内駄屋式で昭和四十年代まで牛と同居していた。菊栽培を始めてから中を少しは改造しているとはいえ、柱も梁も仏壇の板も当初のままで相当古くはなっている。

そのせいかどうかはわからないが驚くなかれ、出てきた虫を調べたらシバンムシとあった。漢字で書くと死番虫だそうだ。冗談じゃない。もっと良い名前でも良かろうにと思いながら英語で調べたら、あ～あ、Deathwatchi beetle だった。

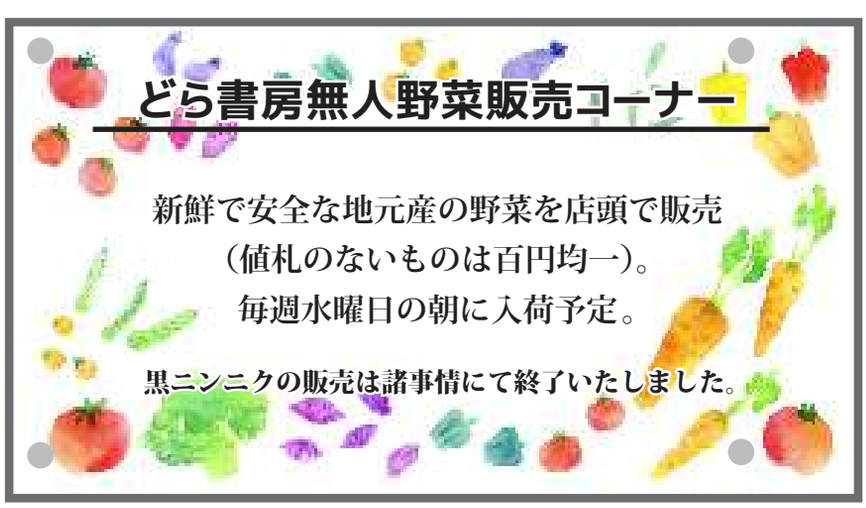
縁起でもない。仏さんが虫の知らせを八十過ぎた私にしているのだった。死ぬのを時計をもってカウントダウンしている虫が仏壇から私を見つめているという話なのだ。Deathwatchi beetle を死番虫と訳したのは名訳というより迷惑だ。

２ミリ程度の虫だが殺虫剤を穴の中へ吹き込んだらいっぱいゴミが出てきた。木くずと思いきや虫眼鏡で見ると写真（下）のごとく虫や幼虫でさすがに気持ちが悪くなった。

ところで虫も良い意味で使われることもある。「本の虫」がそうである。本から離れられない類の人達のことだ。読書しないシミも居るにはいるが。まあ本には無縁の人が圧倒的に多いのが世の中ではある。

話は変わるが菊にも茎に穴をあけて入る虫がいます。菊牛（キクスイ）でどの栽培書を見ても必ず記載されている害虫だ。菊の本体を途中から枯らす厄介なカミキリなのだ。初出は明の時代の『菊譜百詠図』１４５８で、カミキリムシの研究者であった故中村慎吾先生は『日本産カミキリムシの食樹と生態』でこのあたりを詳しく記載されています。

さて殺虫剤で虫を上手く殺せたかどうか心配である。だが問題は仏さんを化学物質で殺すことにある。遺影はにっこり笑ってはいるが・・・



寄稿エッセイ

「絵本との再会」

共同通信社大阪支社社会部記者　吉永 美咲

大阪市のとある商店街を1本横に入った所に、その小さな本屋はあった。閉店間際の喫茶店を出て、大雨降りしきる中ふと右を向くと、店のガラス扉越しに本が見えた。ちょっと雨宿り、のつもりで引き戸を開けた。「大切な友達がいる君に」、「乗り物が大好きな君に」、「ちょっと疲れた君に」。各棚には「～な君に」など、読者の気持ちや好きなものごとに分類した本が並ぶ。幼い子どもから楽しめる絵本が中心だが、小説や写真集などもある。

テーマごとに一段一段、背表紙を追っていると、懐かしい絵本のタイトルが次々に目に飛び込んできた。「手ぶくろを買いに」、「めっきらもっきら　どおん　どん」、「だるまちゃんとかみなりちゃん」。大人になって読んでも不思議と新鮮に感じ、やわらかい絵のタッチも相まって、ふっと頬が緩んだ。

しばらく散策していると「世界のあいさつ」という絵本に思わず手が伸びた。ああ、これも家の本棚にあったな。中身はおぼろげな記憶しかないが、地球に目と鼻がつき、手足が生えた特徴的な漫画風の絵の表紙。主にアジアやアフリカの国々のあいさつが漫画のようにコマ割りで紹介されており、20代になってもなかなか興味深い。後付けかもしれないが、思えば、私が世界に関心を持つきっかけの一つだったかもしれない。「日本の周りには、知らない世界が広がっているんだな」という心を芽生えさせてくれた一冊かもしれない。



今でも世界のどこかで争いが絶えない。少しでも相手を知ろうとする気持ちがあれば。世界は広く、自分たちとは異なる考え方をする人や、異なる文化があって当たり前であり、そこに優劣はないことはわかるはずだ。

今年は戦後81年。先日、4人の戦争体験者の方にお話を伺う機会を得た。私たち20代が、直接お話を聴くことのできる最後の世代だと痛感した。戦争体験を自らの口から語ることのできる人は年々少なくなっている。後世に継承し、新たな争いを生まないため、今を生きる私たちに何ができるのか考え続けていきたい。

どら書房 郷土史資料コーナー（貸し出し無料）



地元の郷土史に関する貴重な資料を収集、販売ではなく貸し出しを行っています。
閲覧は自由ですので、興味のある方はご自分の目でご確認ください。
まだ全体の資料の整理ができていませんので、問合せについては対応できないときもあります。非営利活動ですので、ご容赦ください。

※「県北どらくろあ」のバックナンバーも揃えていますが、ネット上でダウンロードできますので、なるべくご自分でプリント、製本をお願いします。

ハロー注意報㉝
――進駐軍がいた町のはなし
秋の味覚の顛末記

松岡 初枝

まだ暑さが残る九月、長い夏休みが終って少し気怠さが残る朝の風景、「やれやれやっと学校が始まったよ」というホッとした顔の祖母や母を思い出す。昔読んだ『サザエさん』の漫画の中で、フネさんとサザエさんがカツオとワカメを学校へ送り出した後、嬉しそうな顔をしてジュースで乾杯していた。どちらにしても、夏休みでダラけた子供達の世話と、朝・昼・晩の食事の支度から開放されたことから、思わず乾杯したくなる気分は今ならよくわかる。



秋の初めに採れるチダケ（乳茸）

今から六十年以上も前、私の住む地は、昔から通っている街道筋にある商店や町屋、少し離れると農家が点在している農地、その外側には武蔵野の雑木林が広がっていた。江戸時代には、今の所沢あたりの三冨（さんとめ）地区は、クヌギやコナラの木々が計画的に植林され、その落ち葉で堆肥を作り、堆肥を使って育てられた野菜は江戸の町で消費されていた。野菜を届けた後は江戸の町から下肥を運んで堆肥を作る。このくり返しで、無駄のない循環システムが出来あがっていた。因みに、所沢には“肥沼（こいぬま）”“肥田野（ひだの）”などの名字が多くある。三冨より少し外側であるが、入間川の地も江戸や川越の松平様の城下への農産物の供給地になっていた。

子供の頃、少し遠くまで歩けば雑木林が広がり、コナラの実のドングリ拾いができるし、秋になると食用になる茸、ハツタケ、ナラタケなどが多く生える。中でもチダケは別格の旨さだった。「この前降った雨でチダケが出てるだろうから、明日あたり山へ行ってみるかい?」近所のおじさんが祖父を誘いに来た。「そうだね、そろそろチダケだね」。祖父は東京生まれだが、この地に来て夏の鮎釣りが終る頃に、秋最初に採れるチダケが大好物になった。チダケはオレンジ色に近い茶色の傘で、茎を折ると白い乳のような液が出る。それで乳茸、チダケと呼ばれるが、この茸は食用になるか、毒茸かがすぐに判別できるので、茸狩りに行っても安心して持ち帰れる。「じゃあ、朝露が落ちついた頃に行ってみようか」

次の朝、五、六人のおじさん達が集合して、歩いて三、四十分程の雑木林へ出掛けて行った。「山は一人で行くもんじゃないよ。迷ったら帰れなくなる…」。よく茸狩りに行って帰り道がわからずに大さわぎになったことがあるらしい。「ムジナに化かされた!」なんてまことしやかに言われたこともあったらしいが、広い雑木林の単独行動は危険なのだ。何はともあれ、昼過ぎに帰ったおじさん達の籠には大量のチダケが入り、皆ニコニコ顔だ。「さあ、今夜は“ヒモカワ”（幅が広く薄いうどん）と油味噌だ!」。この日の献立はどこの家も同じだ。祖母は八百屋で茄子を沢山買って来た。「はっちゃん、生うどん屋さんでヒモカワ買って来てよ!」「あっ、おじいちゃん茸狩りに行ったの?」いつもは渋々行くお使いも、今日はすっ飛んで行った。「おばちゃん、ヒモカワ四百グラムください」「あらはっちゃん、おじいちゃんチダケ狩りに行ったの?」「沢山採って来たんだ!」「やっぱり〇〇さんも△△さんもヒモカワ買って行ったよ」

さあ、今夜はチダケと茄子入りのヒモカワの煮込みと、チダケと茄子の油味噌が御近所の共通の夕食となる。茄子はチダケと相性がいいのと、昔から茄子は毒消しになるという言い伝えもあって、安心して食べられるその旨さは、初秋の大ごちそうな

のだ。まだ暑さの残る食卓には、いい匂いと笑顔が溢れる。弟達も「じいちゃん、また茸採って来てよ！」と汗をかきながら腹一杯になるまで食べる。今はもう雑木林も無くなり、団地ができてしまった。今はあの旨い茸は幻となってしまった。

「そろそろ秋刀魚だね」。旨い物には目が無い我が家は、誰もが“秋刀魚がとれた”という情報を待っていた。ラジオやテレビで「秋刀魚が大漁」というニュースが流れると、次の日祖母が行きつけの魚屋へ飛んで行く。果たせるかな、大きな樽に氷漬けにされた秋刀魚が店先にあった。「あっらー、いい秋刀魚、七本買います」。大人も子供も一本づつ、私達子供だってしっかりと食べた。「はっちゃん、大根買って来てよ」。大根おろしは祖父の役目だ。祖母が七輪と炭を用意すると、祖父が炭を熾こす。さあ、今夜の主役のお出まし、家の中で焼くと煙がすごいので、裏口から出た露地に七輪を置いて焼く支度をしていると「あらお久仁さん、いい秋刀魚だねえ。どこの魚屋？」「文（ぶん）さんとこ、樽秋刀魚だから活きがいいよ！」。隣と奥の家のおばさん達も急いで買いに行って、三軒の夕食用の秋刀魚が三つの七輪で焼かれることになる。



七輪で焼く秋刀魚の味は最高！



産地直送の山梨のぶどう

なにしろ三軒の家で同時に二十匹近くの秋刀魚を、狭い露地で焼き始めたから煙はモウモウとたち、囲りには良い匂いで溢れかえる。おばさん達が団扇でバタバタ煽いで焼いていると、「カンカン、ウーウー」と音をたてた消防車が家の前で停まったではないか。消防士のおじさん達がドッと駆けつけた。「火事はどこですかー!!」大声で叫んで火元を捜す。「消防士さん、火事なんかじゃないよー。三軒で秋刀魚焼いてるだけですよー！」「エッ、この煙は秋刀魚焼く煙ですか？」「さっきから三軒で焼いてるんですよ」「ハーア…、秋刀魚の煙ですか…、どうりで火事場とは匂いが異う」「どこかの人が煙だけ見て火事と間異ったのかネエ」おばさん達は大笑いしているが、消防士さんたちは一報を受けて駆け付けたという訳だ。「あのー、出動したからには、上へ報告しなければなりません。どなたか一人、書類に名前を書いて下さい」「私が書くよ」祖母がサインをしながら「しかし、どこの人かねえ…、早トチリだよ」と言った。消防士さん達も笑いながら「まあ、気をつけて焼いて下さい。くれぐれも火の用心でお願いします！」。露地の外には大勢の人だかりができていたが、皆笑いながら帰って行った。消防車も帰り、三人のおばさんの大笑いと共に、旨そうに焼けた秋刀魚が、それぞれの家の皿の上に並んでいた。

毎年秋になると、山梨県勝沼のぶどう屋さんが採れたての巨峰やマスカットを直売にやって来る。家では毎年買っているので、店の前に車を停めての産地直送販売会が始まる。店のお客様や近所の人達がワイワイと買い求めてゆく。「このぶどう食べたら他のはもう食べられないよー」、ぶどう屋さんが試食用にくれた大粒の巨峰を口いっぱいにして、皆の笑顔は中秋のお月様のように輝いていた。

近ごろの九月はまだ夏の続きのような暑さで、食文化も変化した。当時の秋の味は、そのエピソードも含めて、忘れられない旨さと楽しさで一杯なのだ。

二、三カ月に一度、漫画喫茶、いや、今はネットカフェか……、利用するために、街中の繁華街に出掛けて来る。読み続けている漫画の新刊を読むためだ。

漫画やアニメが日本の誇る文化だと認知されて、大人でも堂々と読めるようになった。わたしが子供の頃は、漫画を読むと頭が悪くなると言われて、こそこそと親に隠れて読んでいた記憶がある。本を読むのも好きだったが、漫画も大好きだった。

東京でサラリーマンをしていたとき、月曜日の朝が辛かった。つくづく自分は勤め人には向いていないのだと思う。満員電車にもみくちゃになりながら、このまま降りないでどこか遠くへ行ってしまいたいと思っていた。

そんな月曜日の救いが、少年ジャンプだった。発売日なのだ。「スラムダンク」「ヒカルの碁」「アイシールド21」……、心躍らせて、ページをめくっていた。還暦の六十歳を目前にして、さすがに漫画雑誌を買うことはなくなったが、気になる漫画は単行本で読み続けている。

鉄道やバスを利用するにも、自分の車で来るにしても、ネットカフェがある街までは時間がかかるので、たいがいは泊まりがけになる。普段とは違う空間をのんびり楽しみたいからだ。鍵付個室という部屋があって、一畳半ほどの狭い空間だが、安心して寛ぐことができる。

パソコンのモニターに、注文していた食事の用意ができたというメッセージが入った。警察の指導で、店が提供する料理や飲み物を鍵付個室では飲食できないルールになっている。完全個室なので、それを認めると宿泊施設になってしまうということか。届け出は「休憩室」なのだろう。

ICカードのストラップを、首にかけているのを確認してから部屋の外に出た。これが鍵替わりで、ホテルのオートロックと同じである。

鍵付個室のフロアから出ると、テーブルの上にモーニングセットが置かれていた。白い皿に、フライドポテトと焼いたトーストが盛りつけられている。これで料金は百円、朝はこれぐらいがちょうどいい。

ドリンクバーでカフェモカを選んで、朝食にとりかかった。バターナイフでマーガリンをトーストの全面に薄く塗り込んで齧りつく。フライドポテトをケチャップに浸して口に運んだ。

（うん？）

ネカフェ放浪記

――現代御伽草子⑯

あきふゆひこ
亜木冬彦

※県北の歴史や風物を題材としたフィクションです。

目の前の隣の席に、白髪の老人が坐った。わたしのような中年男の利用者はけっこういるが、さすがに爺さん婆さんの姿を見るのは珍しい。グレイのゴルフウエアのような身軽な格好をしているが、白髪をオールバックに撫で上げた顔は、彫りが深くて気品がある。

老人はドリンクバーで三種類の飲み物を用意した。その色合いから、カフェオレ、ココア、コーンポタージュ。

（おれは何をやってるんだ？）

二杯目に入れたコーヒーを飲みながら、老人の様子を眺めている。

老人は、トーストの耳の部分をちぎると、カフェオレのカップに浸して、口に運んだ。咀嚼してにっこり笑った。今度はパンの耳をココアに浸して口に運ぶ。コーンポタージュでも同じことを繰り返して、うんうんと満足そうに頷いた。パンの耳を全部食べてしまうと、やわらかい部分をちぎり、それにたっぷりとマーガリンを塗って口に運ぶ。

（うまそうだな）

同じものを食べたはずなのに、そう思ってしまった。老人と視線が合った。あわてて視線をそらそうとしたが、老人が笑顔で会釈したので、わたしもぎこちない会釈を返した。

「ぼくのような身寄りのない老人は、お金があってもなかなか入居させてもらえないんですよ」

ご老人……、塩野さんに誘われて、天然温泉が売り物の健康ランドに来ていた。同じ甚平タイプの室内着を着て、並んでソファで寛いでいる。着ていたものはすべてコインランド

リーで洗濯中で、自動で乾燥までやってくれるらしい。

塩野さんが長年暮らしていた賃貸マンションが取り壊されることになり、近場で転居先を探したのだが、なかなか決まらない。しばらく前に仕事をリタイヤしていたので、この近辺で暮らす必要はないのだと気づいた。家財道具を全部処分して、必要最小限のものだけトランクルームに保管、旅行カバン一つで放浪の旅に出た。

最初はビジネスホテルに泊まっていたという。



「あれはだめです。閉鎖された空間だから、孤独に蝕まれてしまう」

次は地方の旅館。家族的な小さな旅館を選ぶようにしたという。

「視線を感じましてね。わたしのような老人が、一人でこんな場所に来ているのはワケありだと思われる。自殺しに来たんじゃないかと心配したと、面と向かって言われたこともあります。まったく、老人ハラスメントです」

語気が強くなった。

「ある地方都市の街中を歩いていて、少し休みたいと思ったんですが、ネットカフェの看板しかなかった。若い人が利用する場所だと躊躇しましたが、好奇心はあったので、おそるおそる覗いてみたんです」

受付の若い女性スタッフが、とても親切に応対してくれたという。

「最初は操作がわからずとまどいましたが、馴れてしまえばなんでもない。こんなに楽しい場所はありませんよ。今まで漫画はほとんど読んだことがなかったのですが、食わず嫌いでした。今では立派な漫画オタクです。夢中になって一晩中読んでしまい、次の日はビジネスホテルでずっと寝ていたこともあります」

「どうしてわざわざホテルに？」

「続きが気になって眠れない。百巻以上はある大作ですからね」

二人で大笑いした。それだけ金銭には困っていないということか。

「これからもこういう生活を？」

「そうですね。さすがに無為な生活にも飽きてきました。もうしばらくぶらぶらして、体がまだ動くようなら、仕事に復帰しようかと……」

驚いた。

「失礼ですが、どんな仕事を？」

「医者です。産婦人科の医者なんですが、他人の赤ちゃんを取り上げるばかりで、ぼく自身、結婚したこともないんです」

ホアホアの顔が浮かんだ。産婦人科医がそばにいれば、何かと心強いだろう。

「しばらく山の方で暮らしてみませんか？　源泉掛流しの温泉が入り放題です」

興味は引かれたようで、しばらく考えていた。

「でも、山の中にネットカフェはないですよね」

「大丈夫、近くに古本屋があります。ネットカフェに行きたくなったら、わたしが連れて来ます」

思わず大きな声を出してしまった。

まちの古本屋さん
どら書房
古書探索の旅に、お気軽にお立ち寄りください。

・無料本、百円本、50 円本などのコーナー。
・地元のポストカード、新鮮野菜の店頭無人販売もやっています。
※九日市の開催日は定休日でも開店します。

●庄原市中本町 2-1-10　●定休日：毎週日・月・火曜日（2月は在庫整理で休業）
●TEL: 090(9913)3052　●営業時間 9:30～18:30（昼食休憩 12:00～12:30）
※広島銀行庄原支店の手前（三次側から）※交差点角のまちなか駐車場が使用できます。

特別連載⑥⓪

「旧暦」のカレンダーを見る

古川 行洋

第六部　旬と花を見る

六月と七月の旬

今年の八月一日から三十一日は、旧暦では六月十九日から七月十九日です。



スイカ（西瓜）

夏といったらやっぱりスイカです。いちばんの旬が八月半ばの立秋を過ぎるため、季語では秋とされています。

原産は意外にもアフリカ地方とされていて、日本には室町時代ごろ伝わったといいますが、今のような縞模様の甘いスイカが流通するようになったのは、昭和になってからだそうです。

天ぷらとスイカの食べ合わせが悪いのは、油分と水分が胃に負担をかけるせいだと言われています。

なす（茄子）

原産地はインド東部で、中国を経て日本に渡来し、奈良時代には栽培されていたと言われています。

「秋なすは嫁に食わすな」という諺があります。これには、裏腹の二つの説があります。「旬でおいしい秋なすを嫁に食べさせるのは惜しい」という説と、「秋なすを食べ過ぎると体を冷してしまうので、食べ過ぎないように」という説です。

かぼちゃ（南瓜）

かぼちゃが収穫されるのは、夏から初秋にかけて、そこから二～三ヵ月貯蔵すると水分が抜け、冬になる頃においしく食べられます。

南瓜は、戦国時代にポルトガル人が持ち込んだとされるウリ科の野菜です。カンボジア方面からとれた瓜として紹介されたため、「カンボジア」が転じて「かぼちゃ」になったと言われています。このとき渡来したものは東洋南瓜でした。現在の主流は西洋南瓜です。別名は唐茄子、南京などです。

はぎ（萩）

萩は、秋の七草にも数えられており、七月から十月にかけて、赤紫色（まれに白色）のチョウの形の花をつける落葉低木です。

萩は、痩せた土地でもよく育つ特性があり、日本のほぼ全域に分布しています。なかでも宮城県は萩を県花、仙台市も市花としています。

仙台地方の古い呼び名である「宮城野」は、萩の歌枕として『万葉集』の中にも多数登場しているほか、元禄二（一六八九）年に仙台を訪れた松尾芭蕉は、『奥の細道』の中に、「宮城野の萩茂り合ひて秋の気色思ひやらるる」という歌を残しています。

また、旧暦八月十五日から十六日の夜中に行なう月見を「仲秋の名月（十五夜）」と呼びますが、この日に萩とススキを月見団子とともに月に供える風習は今でも残っています。

あわび（鮑・鰒）

名前の由来は「貝殻と合わない身」という言葉が転じたものと言われています。

あわびは、巻貝の仲間ですが、貝が巻いていないため、二枚貝の片割れがなく、身が貝殻からはみ出ているように見えます。日本全国の比較的浅い水深の岩礁にいます。さざえと同じように、海の中でもわりと簡単に見つける事が出来、また大変美味しいので密漁の対象になることが多いようです。あわびは四種類で、その中でもクロアワビが一番美味しいとされています。

しまあじ（縞鯵）

旬は夏から秋です。伊豆諸島でよく捕れ、また身に黄色の縦縞があります。こう呼ばれたようです。そして、縞鯵は刺身にしても、握りにしても、塩焼きにしても食感がよく、脂味もしっかりしていて美味しく、絶品と言われます。

海外ツアー添乗員日誌㉚

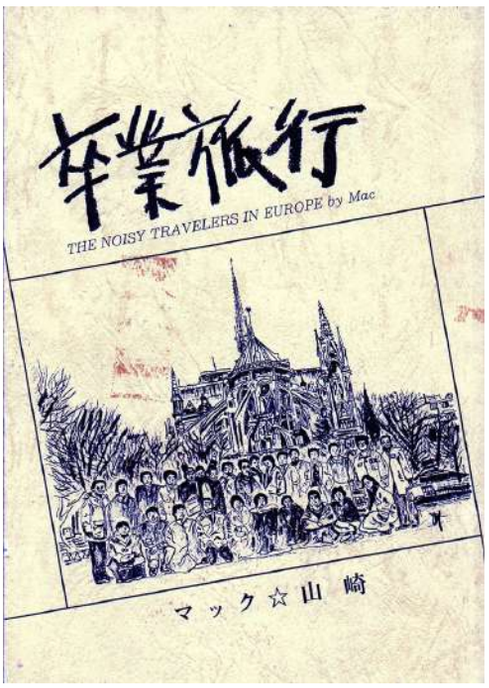
ヨーロッパ23日間「卒業旅行」(24)

マック☆ヤマザキ

学生達がそれぞれ自宅に帰り着き、昨日までの「ヨーロッパ6か国・23日間の卒業旅行」の出来事を家族や友人に、何から話そうかとうずうずしていることであろう。

当初、卒業論文の合否判定が気になって、毎日国際電話を入れていた学生が、運よく「パス」の知らせをもらってから、今回のツアーの牽引車的存在に早変わりして、旅を盛り上げてくれた。「花博覧会」のスタッフとして働くため途中から2名の女子学生が早く帰国したものの、我々総勢28名が日本に“凱旋帰国”したのだ！

この長期にわたる旅行は、私にとっては4回目（4年）の卒業旅行の業務執行者であり、指揮官として、小間使いとして、若者に接する体験ができた。ともかく、無事に学生達を日本に連れ戻すことが出来て、満足感と達成感に浸ることができた。今回は総集編として、この旅行を振り返ってみたいと思う。



ヨーロッパの歴史は古く、日本と比べるなんて言うとおこがましいが、その古さを理解して、敬意をもって毎日を過ごしてもらった。物見遊山から謙虚な姿勢で、訪問した国に接するよう指導した。

今回の旅行を「卒業旅行」という小冊子にまとめたのだが、表紙絵に使ったスケッチは、パリのノートルダム大寺院を背景にした集合写真である。天を突き刺す尖塔はゴシック風の建築の特徴。完成したのは1225年、日本では鎌倉幕府の時代だった。世界文化遺産に登録されたこの大聖堂は2019年に火災に遭い、その尖塔が崩れ落ちた。世界のあらゆる宗教団体や、心ある人達からのドーネーション（寄付）で5年後2024年に無事復活した。

ヴィクトル・ユーゴーの小説「ノートルダムのせむし男」は映画化もされて、寺院の名前は世界中に知れ渡っている。一階の「バラ窓」は、美しいステンドグラスが太陽光で様々な色と姿に変化して、学生達の視覚に深く刻まれたことだろう。

ドイツのロマンチック街道は日本の東海道に近い距離であるが、街道筋の家屋や建築物の屋根瓦は、明るいレンガ色、そして白い壁で統一され、電柱は地下に埋設、広告塔や看板は色やサイズ等の規制がなされて統一されている。こうした国を挙げての歴史の保全は、日本も真似しないといけない。観光客への最高の贈り物になるんだと説明した。

日本の経済力の強さを再認識した。日本のソニー、東芝、パナソニック等の電化製品、ニコンのカメラ、トヨタやニッサン、ホンダ等の乗用車が海外でも身近に見ることができて、“ニッポン”を誇りに思ったことだろう。イギリスとフランスを結ぶドーバー海峡の海底では、川崎重工業が鉄道トンネル工事の掘削を進めていた。国を挙げての売込みの最先端を走るのが日本の「商社」で、将来「商社」で働くことも意義があるとアドバイスした。

外国語に関心を持とう！　スイスでは国を挙げて外国語に精通して、世界各国からの観光客相手にお土産品（単価の高い高級腕時計からチョコレートまで）を売り、観光、宿泊及び食事を提供して外貨の獲得に専念している。

彼らは、英語は勿論のこと、イタリア語、ドイツ語、フランス語、スペイン語の会話に精通して、売り上げを伸ばしている。語学が今後の自分の強力な武器になるように、帰国後はNHKラジオの第二放送を活用することをすすめた。

彼らの未来に神の御加護を！

（次回からは、外国人観光客の日本観光のエピソードを紹介させていただく予定です。）

どらくろ俳壇＆歌壇

※参加を歓迎します。

廃線や昔に帰る晩夏光　近藤 昌平
満天や星の王子と薔薇一輪　原 博己
顎に汗熱唱をするミュージシャン　片岡 正人
人よ木よ三伏に伏し喘ぎ居り　隆愚
極暑中強豪倒し甲子園　大槇 三代子
思うこと祖母の作りし心太　寺内 龍二
灯火や瓜の粕漬け母の味　赤川 冬人
喜寿越へし友らと集ふクラス会　松岡 初枝
ドライフラワーだねと笑う婆々たち

投稿＆寄稿

候のことば
「鶺鴒鳴」

隆愚

九月十二日から十六日頃を、二十四節気七十二候で白露の次候、「鶺鴒鳴」（せきれいなく）の候といいます。チチィチチィと鳴く、尾の長い小鳥が鶺鴒の一種、白鶺鴒です。歩く時に尾を上下に振りながら地面を叩く様にする仕草は、「石たたき」とよばれます。

昔は北海道で繁殖し、他の地方へは寒くなってから渡って来る冬鳥だったそうです。今では、よく似た「背黒鶺鴒」等と共に本州全体に一年中居る留鳥になりました。

鶺鴒は日本書紀にも登場するというから驚きです。尾を振る様子を、男女の交わりに見立てたのか、イザナギとイザナミが契りを交わそうとした時、その仕方を教えたのが鶺鴒でした。小鳥の尾を振る動きで、神様たちはピンときたのでした。

二人の神が結ばれるきっかけを教えたという神話から、「恋教え鳥」という異名も持っています。

鶺鴒のひるがへり入る松青し　水原秋櫻子

「インフレの影響」

赤川 仁洋

中国山地の山奥にある過疎地に世情は関係ないと、半ば世捨て人を気取っていたが、昨今の物価上昇の影響をこんなに受けるとは思っていなかった。直接の物価上昇は大したことはない。安いにこしたことはないが、元々質素な生活をしているので、食費が少し上がったぐらいで、調整の範囲内である。

モロに影響をこうむったのが古本屋の売上、半減……、もしくはそれ以下。うちの顧客の多くが高齢者で、いわば年金受給者だ。急なインフレで支出が増えたのだろう、余分な出費は控えるようになった。本が余分なのではない。古本屋の本分は、店内の棚を見て廻って、気になる本をピックアップしてもらう。ピンポイントで欲しい本を探すなら、一般書店かネットの方が確率が高い。さらに言えば、図書館で借りればタダですむ。

救いはネット販売で、こちらは好調、とまでは言えないが、比較的売上が安定している。少し前ならば、古本屋でもどうにか生活はできるよと若い人に言えたが……、商売は難しい。それでも、古本屋はおもしろいです！



どらくろあ 掲示板

地域のイベント情報やメンバー募集など
情報掲示板です。

― 硬式テニス参加者募集 ―

MTEC (Miyoshi Tennis Enjoy Club)
場所：三次運動公園の屋内＆屋外コート

・火曜日（9:30 ～ 12:00）
・水曜日（9:30 ～ 12:00）



《情報＆原稿を募集します!!》

●仲間募集　●教室＆講座案内
●イベント情報　●あなたの大切な本の紹介
●ボランティア・ライター(現地記者)募集！

※応募先はどら書房・赤川まで。
掲載は無料です。

どらくろあ ホームページ

バックナンバーも掲載しているので、ダウンロードしてお楽しみいただけます。

「第54回水庄展」(日本水彩画会広島県備北支部・水庄会)

●日時：9月3日(木)～9月6日(日) 10時～18時(最終日10時～16時)
●会場：庄原自治振興センターみどり信金ホール(多目的ホール)
●入場料無料

◇出品予定者◇

青木照和 市川美南子 碓井節子 沖田輝彦 音谷健郎 柿内文子 坂本義明 滝内千―
竹岡敦子 竹原朝美 堤和之 戸井妙子 中村勝 橋本みゆき 日高久子 福田善子 藤原玉江
藤原三枝 本田則子 安好芳子 山下徳三 山本加代子 若林節美

「ぐんぐん伸びよう会」(教室：川西町241　連絡先：080-3631-9125 やない)



当教室では、一人ひとりに合った学習（ちょうどの学習）をし、年齢・学年に関係なく、生徒ができるところから始める学習法です。対象は、乳幼児～小学生。
教室とご家庭との二人三脚で子どものもっている可能性を伸ばしていきましょう。無料体験受付中！！
0~3歳：4,000円（週1回）。4歳～小6生：算数＋国語（4,500円、週1回）。お気軽にご連絡くださいね。

編集後記

◇暑かったですねえ……、いや、今でも暑いです（苦笑）。昨年もですが、蚊に刺されることがほとんどなく、ボウフラや蚊も生存できない暑さなのでしょうね。

◇「芸備線ストロール」「木次線ストロール」の書籍化に向けての作業、店内はエアコンがないので大変でしたが、印刷所に入稿することができました。音谷さんの「倉田百三」本も一時トラブルがありましたが、確実に進行しています。

◇吉永美咲さんの寄稿エッセイ、郷里出身の若い方が元気な便りを寄せてくれるのは嬉しいですね。地元の方の寄稿も歓迎します。

◇新・芸備線ストロールも広島目指して頑張ります！

発行：どら書房
〒727-0012
庄原市中本町2-1-10
☎090(9913)3052(赤川)
e-mail:touzin@nifty.com

誌面デザイン:ROUTE183
協賛：九日市愛好会

第299回

しょうばら九日市（くんちいち）

毎月九日に開催されている街角市場です。発祥は天正年間（1573～1591）、織田信長が安土城を築いたり、豊臣秀吉が大阪城を築いたころ、物々交換の市（いち）として始まりました。その歴史ある市が2001年に復活、地元の出店はもちろん、近隣他県からの出店＆名産品で賑わっています。



TOPICS

★猛暑対策で閉店時間は12時です。

★市民ギャラリー「アート多愛夢」
9月8日（火）～10日（木）10時～15時
「庄原市シルバーリハビリ体操」
（指導士会・庄原支部）

★どら書房、無料休憩室（漫画読み放題）
※本格コーヒー100円

★特別支援学校（場所：楽笑座）
お菓子、木工品等の手工芸品販売

★HONMACHI STAND→コーヒー100円引き

★キッチン北川・店頭販売（9：30開始）
※大好評のおいしいお惣菜がたくさん！
かき氷あります!!

★あなたも自分のお店を出してみませんか？（出店者募集中！）

＊出店申込みは、【毎月２０日締切】　コンパネ１枚スペース１，２００円～
九日市愛好会事務局　FAX（０８２４）７２－８２８５
〒７２７－００１３　庄原市西本町２－１－１０（楽笑座内）

【ホームページ】
http:www.kunchi-ichi.jp